

京都大学	博士（文学）	氏名	山根 秀介
論文題目	ウィリアム・ジェームズの多元論哲学		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>哲学の歴史においては、つねに一元論的な思考と、それに由来する存在論、および宗教論が優勢を占めてきた。純粹なものを追求しようとする傾向をもつ哲学的理性は、世界に満ちる無数の個別的なものの背後に超越的で絶対的な万物の根源を探し求め、この探究は、一神教であるキリスト教とさまざまな仕方で結びつく中で、ますます「一なるもの」への志向を強めていった。散発的には、こうした方向に抗う思想も出てきたが、それが一つの潮流を形成して大きな運動となるところまではいかなかった。多元論は、哲学史においてはあくまでマイナーであり、傍流でありつづけてきたのである。</p> <p>そうした中で、ウィリアム・ジェームズは、多元性を本質とする哲学の可能性を模索した数少ない哲学者の一人である。本論文では、このジェームズの多元論哲学の全体像を、経験論、認識論、プラグマティズム、宗教論といった諸側面から浮かび上がらせる。それによって、ジェームズの多元論哲学が、彼の独自の世界理解というべき「改善論」の可能条件として構築されたものであることを示すことが、本論文の目的である。改善論とは、人間は自らの行為によって世界の自然的な運行に介入して、より良い方向に導いていくことが可能であるという考えである。本論で扱われるジェームズ哲学の諸側面は、この改善論が成り立つための前提として考えられるのである。</p> <p>序章で以上のことを説明した上で、本論は以下のような順序で展開される。</p> <p>第一章「物心二元論の打破及び「純粹経験」の分化」では、ジェームズの「根本的経験論」の企図の一つである、「純粹経験」による二元論の打破の企てに焦点が当てられる。純粹経験は、それ自体としては主観でも客観でもなく、そのようなものを構成している無属性の素材であり、すべてがそこから生じてくる源泉である。主観・客観という二分法は、この中性的な純粹経験が他の純粹経験との関係に入ることによって獲得する認識的な機能に過ぎず、何ら実体的なものではない。だとすれば、そうした純粹経験からいかにして主客からなる通常の経験世界が形成されるのかが問題にならない。ここにおいて、主観世界の形成においても客観世界の形成においても決定的な役割を果たすのが、「身体」という契機である。身体的な「温かみ」によって純粹経験が「私有化」されることで主観的な自我の歴史が構築される一方で、身体的な行為による「篩い分け」を通して客観的な物理的世界の歴史が構築されていく。そうして、私たちが行為するたびごとに、私たちの身体を通して自己自身と外的世界が刷新され、創造し直されていく。潜在的なものとしての純粹経験から具体的な世界への「現働化のプロセス」は、つねに私たちの身体を通して作動するのである。</p>			

第二章「多元的存在論と有限な神」では、純粹經驗を素材として形成された世界が
いかなる在り方をしているかが考察され、それがジェイムズの多元的存在論と「有限
な神」という神観と緊密に結びついていることが示される。純粹經驗を素材とする世
界の在り方を表現するのは、「非連続性の理論」と「外的関係」という二つの基礎概
念である。「非連続性の理論」とは、世界は有限数で有限量の離散的な単位が寄り集
まることによって構成されていると主張するものだが、そこにはシャルル・ルヌヴィ
エの存在論からの影響が強く働いている。そうした諸単位は相互に何らかの仕方で関
連するが、それは「関係」という言葉で表現される。もろもろの単位、あるいはその
単位が形作る個物は、「内的関係」によって接続し「外的関係」によって分離するこ
とで、世界を多元的なものにしていく。この概念は彼の最大の論敵であった絶対主義
者ブラッドリーの「関係」概念、とりわけ「内的関係」を批判することによって彫琢
されたものである。外的関係の非連続性は、全ての関係を超越的な一者へと還元する
ブラッドリーの関係概念への批判となる。それを通して、ジェイムズはブラッドリー
哲学の中心を成す一元論的な神概念を解体し、「有限な神」という概念を提出するに
至る。それは、この世界の全てを必然的に決定している超越的な一者としての神では
なく、時間的・空間的・能力的に有限な、私たちの協力者としての神、他のあらゆる
存在者と同じく、この宇宙を構成するメンバーとしての神なのである。

第三章「プラグマティズムにおける実在とその認識」では、パースのプラグマティ
ズムとの比較を通してジェイムズのプラグマティズムの一般的性格を示した上で、こ
のプラグマティズムが体現するジェイムズ独自の真理論・実在論を明らかにする。ジ
ェイムズにとって、真理とはあらかじめ真であることが決まっているものではなく、
人間の身体的な行為による動的な過程、流れゆく経験の連鎖を通して、感覚的経験と
しての「実在」と一致することになった観念である。ここにジェイムズの純粹經驗論
とプラグマティズムの接続点がある。重要なのは、ここでジェイムズが「実在」とい
うのは、感覚的経験だけに限られるのではなく、自ら自身で獲得した、あるいは人類
の遺産として受け継がれてきた過去の諸真理も含まれることである。私たちは過去か
らいかんともしがたいさまざまな種類の制約を受けながらも、行為においては過去に
形成された無数の真理を利用しつつ、それを通して世界とのより良い接触を可能にす
る新しい真理を作っていく。そうして作られた新たな真理は、過去の真理の集合体
に加えられ、今度はそれを他の人が使えるようになる。このような一連の過程によっ
て人間の歴史は形成されてきたのであるが、行為によってこの動性に触れる営みは、
哲学史上、実在の「直観」と呼ばれてきたものに相当する。それは、実在に触れるこ
とに由って実在を作り変えるような直観である。ジェイムズのプラグマティズムを動か
しているのは、このような種類の直観なのである。

第四章「宗教的経験、宗教的実在」では、三章で扱ったジェイムズのプラグマティ
ズムが宗教の領域でどのように働いているかを検討し、それを通して経験と実在とい

う概念を改めて考察する。宗教的経験によって看取される実在は、普通の意味における感覚によって直接把握できるものではないが、同時に感覚的経験の外側から間接的に「実在についての感覚」を喚起し、それによって私たちを動かすものである。このような宗教的実在を、ジェイムズは「より以上のもの」、「より高い部分」、「潜在意識的」領域といった言葉で表現する。それは私たちの通常の意識より大きく、それを取り囲み、それと連続し境を接しているが、日常的・世俗的な生からは薄い膜によって隔てられている。しかし、宗教的な経験においては、この膜が破れて、通常の生からは想像もつかないような力が流れ込んでくる。それによって、私たちはいやおうなく別の秩序の実在を突き付けられ、変容を迫られる。このことが明らかにするのは、私たちが自分のものであると考えている意識は、あくまで広大な意識から、現実の利害関心のために身体的機能によって「限定」され、切り取られた一部分にすぎない、ということである。ここにおいて、そのような限定を受ける以前の実在として、「潜在意識的」領域と「純粹経験」とが同一視されることになる。これらは同じ一つのことを、一方は宗教的な側面から、他方は哲学的な側面から見たときに現出する二つの相であって、通常の意味での個人的な意識を超過した領野から、その都度身体的な行為によって自己が切り出され、それに応じてその自己が相対する客観世界が作り出されるという根本構造は同じである。ここにおいて、ジェイムズの形而上学と宗教論とが合流するのである。

第五章「自由意志と新しさ」では、以上の各章の議論を踏まえて、それらを「改善論」へと接続するための不可欠の要素として、ジェイムズの「自由意志」論と「新しさ」の概念を検討する。ジェイムズの自由意志論は、意志が自由であることを「論証」しようとはせず、決定論が抱えている難点を指摘することで、その立場が決して確かなものではないということを示し、間接的にその反対の立場である非決定論を導くという経路をとる。そして、この自由意志の問題は、「新しさ」というより存在論的な性格の強い問題と連結される。ジェイムズの経験論とプラグマティズムの中核にあるのは、時々刻々とそれ自身を更新しつつ流れゆく経験であるが、そこでは、過ぎ去ったものは戻らず、同じ経験が繰り返されることは決してないという変化と時間の不可逆性が支配している。ここから、ジェイムズの純粹経験を「新しさの純粹な沸騰」が起こる場として規定することができる。純粹経験とは「現在」そのものであり、現在とは「新しさ」が覚知される場面である。そして、このように純粹経験の絶えざる継起に「新しさ」、「創造性」、「偶然性」といった性質が付与されるのは、純粹経験相互を結ぶ関係がどこまでも「外的」な性格を保持するからである。「外的」な性格を失わない諸関係によって織りなされる世界は、予測不可能で偶然的な仕方で行進するが、同時にたえず新たな関係が編み直される場ともなるがゆえに、主体の努力や行為によって一定の方向づけをなすことが可能である。このような世界の可塑性が、ジェイムズにとって「改善論」の可能条件であり、私たちが世界の「救済」

を希望しつつ生きることを許容するのである。

最後に終章「多元論から改善論へ」では、本論文全体の終着点としてジェイムズの「改善論」の性格と意味を明らかにした上で、それが以上の議論を通して浮き彫りにされたジェイムズ哲学の諸側面の合流点であることが示される。「改善論」が成立するためには、私たちに自由意志が備わっていること、世界はあらかじめ決定されておらず、偶然や創造や新しさが入る余地があること、世界はそのような私たちの行為によって作りかえられうるということ、私たちと「潜在意識的」領域を通じて繋がっている「有限な神々」と協力してそれを行うということが求められる。ジェイムズの「改善論」とは、私たち自由なる意志をもった人間が、私たちの隣で私たちと同じ空気を吸い、共に行為することができる神々と協同して、世界のうちに「新しさ」をもたらし、そのたびごとに世界を創造し直していくことができるという力強い宣言である。ジェイムズの多元論哲学は、私たちの生きる世界についてのそのようなヴィジョンへと収斂するのである。

(論文審査の結果の要旨)

ジェームズはきわめて多面的な思想家である。心理学という学問分野自体のパイオニアの一人であり、生彩豊かな宗教論の著者であり、アメリカプラグマティズムの起点となった人物であり、純粹経験を基底概念として哲学を書き換えようとした未完の企ての主でもある。この多様な相貌を貫く統一像を形成すべく、あるいはこの多様な相貌の中でより見込みのある側面を継承、発展させるべく、ジェームズの死後百年にわたって、さまざまな種類の研究が積み上げられてきた。しかし、「多元論」については、ジェームズ自身が自らの立場を言い表すためにしばしばこの術語を用いているにもかかわらず、これを軸としてジェームズ思想の全体像を描こうとする試みはごく少ない。ベルクソンからドゥルーズの流れをくむ近年のフランスでのジェームズ研究には、ジェームズの多元的存在論の今日的意義を強調する有力な解釈がいくつかあり、本論文もその成果を踏まえているが、それらはあくまでジェームズ思想の一側面の創造的活用を狙ったものである。こうした中で、ジェームズ思想の全体を「多元論哲学」として統合的にとらえ直し、その多様な構成要素の相互関係を描き直すことによって、ジェームズ思想の全体像を「改善論」と呼ばれる世界理解へと収斂するものとして提示しようとしたこと、そこに本論文のもつ独自性がある。

ジェームズ思想の「多元論」としての性格が比較的注目されてこなかったことには一定の理由がある。心理学期以来の「意識の流れ」説にせよ、主客未分の「純粹経験」概念にせよ、表面的には一元論につながる「連続性」の立場に見えるからである。これに対して、本論文は、ジェームズ思想の各側面において、連続性の裏側で作動し多元論につながる非連続性が決定的な意味をもっていることを、ジェームズのテキストの細部の精緻な読解と思想史的なアプローチの両面から解き明かしていく。この周到な作業の集積が、本論文の行論に説得力を与えている。

本論文は、序章、全五章からなる本論、および終章から構成されている。序章で論文全体の問題設定を行い、多元論の哲学史におけるジェームズの位置づけを概観した上で、第一章では、純粹経験論が通常の物心二元論を打破して中性的な一元論へと経験論を徹底化する方向を持つ一方で、たえず更新される未分化の経験から主観的文脈と客観的文脈が分節化する瞬間を見届けようとするものでもあり、身体と行為がこの瞬間において主導的な役割を担わされていることを明らかにする。純粹経験の現在における身体の「感じ」から行為する自己とその自己が相対する客観世界が切り出されていく過程を再現する論者の繊細なジェームズ読解が、本論文全体の起点となる。

これを受けて第二章では、純粹経験と純粹経験の「関係」が「非連続性」を組み入れた「外的」性格を許容するものであることを明らかにする。ここで特筆すべきことは、ジェームズのこの洞察の背景に、ルノーヴィエの非連続性論からの影響が認められることを証示したことである。ジェームズがルノーヴィエの著作を読んで自由意志の存在を確信し、抑鬱状態から脱したことは、伝記的事実としてよく知られている。だが、ルノーヴィエの思想を精査した上で、それがジェームズ経験論の中核にどのよ

うに反映しているかを跡づけた考察は前例がなく、ジェイムズ研究への貢献として評価することができる。

第三章では、以上のような純粹経験論の理解を踏まえて、ジェイムズにおけるプラグマティズムの真理論および実在論を取り扱う。真理とは出来上がったものではなく生成しつつあるものであり、ある観念の真理性は、それが行為を通して人間を実在へと導きうることにより検証されるというのがプラグマティズムの真理観であるが、純粹経験論を身体性と非連続性から描き直すことで、プラグマティズムと純粹経験論の接続点が明確化されたことが本章の収穫である。

第四章では、前章の成果をもとに『宗教的経験の諸相』における宗教的経験論を取り上げ、プラグマティズムと純粹経験論の接合という観点から見た時、宗教的経験論が依拠する「潜在意識的領域」と純粹経験は同じ事象を異なる側面から見たものであり、通常の意味での個人的な意識を超過した領野からその都度の身体的な行為によって自己が切り出され、それに応じて客観世界が現出していくという根本構造は共通していることが示される。純粹経験と宗教的経験との関係はジェイムズ研究上の係争点であるが、本章の解釈はやや事柄を単純化しすぎており、その点が惜しまれる。

第五章では、以上の四章の成果を集約しつつ、決定論の難点を指摘することで間接的に自由意志の存在を証示しようとするジェイムズの議論をとりあげる。それによって、これが単なる自由意志論にとどまらず、たえず「新しさ」を湧出させ、人間の行為を介して新たな関係において編成し直されることを待つという、世界の「可塑的」構造を露わにしようとしたものであることが示される。終章では、これがジェイムズのいう「改善論」の成立要件であり、改善論的世界観とはジェイムズの個人的信条にすぎないものではなく、ジェイムズ思想全体の収斂点であることが確認されて、論が閉じられる。

ジェイムズ的連続性の裏側に経験の非連続的な脈動を見分け、独自の多元論哲学としてその全体像を書き換える本論文の試みは、テキストの細部の堅実な読解に支えられて、評価すべき独自の成果に結実している。その反面、この新たな解釈によってジェイムズ思想の収斂点として見えてくるはずの改善論については、それと連動させられる「世界の救済」というテーマがごく表面的にしか扱われていない点を始めとして、なお一層の掘り下げが必要である。しかし、そうした点は論者自身が十分に自覚しており、今後の研鑽によって克服されると期待できる事柄であって、本論文自体の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2020年1月14日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。